HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道漁村における漁協女性部の活動の役割 ： 時代的社会背景との関連と活動者の意識構造に基づいた分析［全文の要約］
Author(s)	小泉, 聡美
Description	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。 https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(水産科学)
Dissertation Number	甲第11323号
Issue Date	2014-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/55378
Type	doctoral thesis
File Information	Satomi_Koizumi_summary.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

博士論文の要約

博士の専攻分野の名称：博士（水産科学）　　氏名：小泉　聡美

北海道漁村における漁協女性部の活動の役割

－時代的社会背景との関連と活動者の意識構造に基づいた分析－

日本の漁業協同組合（以下，漁協）は古来，地域共同体的な性格を有しており，組合員の家族を中心とした漁協女性部（以下，女性部）は1950年代に全国で設立され，貯金と生活改善運動によって漁家および漁協と漁村の発展に貢献してきた。今日の漁村において，その活動は地域振興事業への協力に多大な貢献を果たしているが，近年の女性部は部員の高齢化と減少傾向が進行しており，このような現状において活動を継続するためには，外部的な支援が必要である。女性部の活動はボランティア的な性格が基本であり，活動は活動者の意志や喜びなどの内面的要素に支持される部分が大きいため，適切な支援策を講じるには，活動者である女性の活動に対する意識構造明らかにしておく事が肝要であるが，これまで活動と活動者の意識との対応関係を定量的に示しうる研究は行われてこなかった。

本研究では，戦後の民主化政策と漁村の困窮という時代背景のもとに全国で初めて組織された北海道の漁協女性部を対象に，その組織と活動の特徴が社会背景と活動者の心理的側面に深く関わっていることに着目して，女性部の起源に遡った根源的な活動と今日的な活動の構造分析によって，設立以来の女性部活動に通底する共通性と時代的な特殊性を明らかにし，漁村の形成と地域住民の生活に果たしてきた活動の役割と，今後の活動展開の方向性を考察することによって，漁村の地域づくりに寄与することを目的とした。分析の方法として，「活動と活動に対する活動者の意識」という定性的要素の対応関係に数値的な表現を与えて統計的分析を行い，活動の構造を可視的に示した。分析に必要なデータは，過去の活動については歴史的資料から抽出を行い，今日の活動については全道の女性部長を対象としたアンケート調査から収集した。

本論は序章において研究の背景と目的を述べ，以下の４章で構成した。

第1章では，1950年代の社会的背景をまとめた上で，資料分析によって，女性部活動の起点となる婦人部設立期の活動の構造と特徴を明らかにした。本章の **1 節**では国内情勢と漁村の状況について，女性政策と女性運動の視点から女性史と漁業史を整理し，**2 節**では漁村事情を背景とした婦人部の設立の過程について，「道漁協連研修会の記録」ほか 34 冊の資料の記述を年代に沿って整理した。**3 節**では資料中に分散する部員の発言記録を整理して活動内容を 10 項目にまとめ，更に活動者の心情に関連する記述を抽出して 21 項目の指標要

素として集約した。次に，定性的な記述で表現されるこれらの要素と活動との対応にダミー数値を与えて数値化したバート表を作成して対応分析を行い，クラスター分析によって活動の構造を 2 軸の空間上に表現した。以上の結果から **4 節**では，1950 年代の社会情勢との関連に基づく婦人部の設立要因，および活動の意義と発展要因について，以下の 4 点をまとめた。(1)婦人部の設立要因は，漁村集落が漁協を中心として形成された事と，漁村全体が貧しく，地域住民全体が漁業と漁協の発展を望んでいたために，地域婦人会が協力的であった事である。(2)活動の意義は，実生活に密着した便益と満足感などの内的効果を得られた事と，女性の地位向上を目的に掲げ，村づくりなど男性中心の社会活動に参加できるようになった事である。(3)活動の構造は，貯金運動を中心として，共同購入など個人的活動だが地域に効果を及ぼす活動，勉強会など活動も効果も個人的な活動，署名活動など外部活動であるが個人が評価を感得する活動，の 4 分類で構成されており，外部活動で外部効果のある活動は存在しなかった。(4)婦人部活動の存立構造に関連する潜在的指標要素として，分析で用いた「動機」「満足感」「不満感」「活動効果」の 4 つを選定した。

第2章では，2009 年に行った全道の女性部長に対するアンケート調査の分析から，婦人部設立から 50 余年を経過した 2010 年代の女性部活動の構造と特徴を明らかにした。本章の **1 節**では，1975 年の国際婦人年世界会議以降の女性施策を社会的背景として，都市，農村，漁村の地域特性と女性の社会的活動の枠組みをまとめた。**2 節**では，女性部活動の効果に対する認識について，全道 116 ヶ所の女性部長と任意に抽出した 8 地区の女性部員を対象に，1 章の指標要素をもとに設問を作成したアンケート調査を行った。回答数は部長 66 部，部員 62 部であった。回答は設問に対する 4 段階の反応であるが，これを肯定と否定の 2 段階の順序尺度にまとめ，標本数が少ないことと推定のバラツキを小さくした軸を求めるために，ノンパラメトリックな回帰分析である Passing-Bablok 法を用いて分析を行った。分析の結果，活動による効果に対しては部長の方が部員よりも肯定感が強く，両者の認識に差があることが明らかとなった。**3 節**では部を統括し活動を主導する立場にある，全道 116 部の部長を対象母集団として，全道に共通的な「植樹と清掃」「料理教室」「水産加工品の製造販売」の 3 つの活動について，それぞれの活動に対する動機，満足感，不満感についてのアンケート調査を行った。回答数は 67 部であった。回答結果の分析においては，特異的に反応した回答項目を抽出するために，平均値付近の項目に対して有意な反応を知るための定量的指標として，平均からの偏差得点を標準偏差で標準化した z 得点を用い，回答数の 31.73%が含まれる $1.0<|z|$ の項目に着目した。以上の結果から **4 節**では，今日の女性の社会的地位との関連に基づく漁村女性の地位と，活動の効果と意義および活動の促進要因と抑制要因について以下の 4 点をまとめた。(1)今日的活動は漁協事業への協力が主であり，特に食育と販売促進に関連する事業の重要度が高い。(2)植樹や食育など社会的な意義と効果を持つ活動が行われ，活動者は「視野拡大」「地域内外の人との交流」「地域の PR 効果」に満足感を得ているが，女性の地位向上には結びつかない。(3)部長と部員では活動効果の感得度に差があり，部員は部長よりも肯定感が低い。(4)活動の促進要因は「地域住民との

共同」「地域貢献」「人的交流」であり，抑制要因は「地域住民の無理解」である。

第3章では，まず全道の女性部長に対するアンケート調査から女性部の組織的特徴と，「イベント活動」「料理教室」「起業活動」の実施状況と課題を把握し，次にヒアリング調査から起業活動の継続要因を明らかにした。**1 節**では，全道の女性部長を対象に女性部の現状についてアンケート調査を行い，女性部の組織的特徴と，「イベント活動」「料理教室」「起業活動」の活動の実施状況と課題を明らかにした。回答数は 88 票であったが，設問の項目数が多かったことと設問ごとのデータ数が少なかったことにより，クロス集計の精度を上げることが出来なかったため，分析手法は単純集計による全体傾向にとどめた。その結果，北海道の女性部では「下部組織」という意識が強く，「部員の親睦」と「漁協のための活動」がもっとも重要だと考えられていることが明らかとなった。また料理教室は漁業者からの情報発信の場としても機能しており，活動者にとっては満足度と期待が大きい活動となっていた。**2節**では，起業活動を継続中の 2 つの女性部と活動を中止した 2 つの女性部，および発売に至らなかった 1 女性部を対象に，活動の経緯と必要条件の充足度，中止の原因についてヒアリング調査を行い，起業活動の継続要因が施設と活動メンバーの確保，漁業の支援と承認であることを明らかにした。この結果から **3 節**では各活動の効果と課題，および起業活動の意義について以下の 7 点をまとめた。(1)「下部組織」という意識が強く，「部員の親睦」と「漁協のための活動」が最も重要だと考えられている。(2)水産物の調理品や加工品を活用したイベント活動は多いが，長期的な活動は少なく，起業活動に対する希望も少ない。(3)食品関係で最も問題となるのは加工施設であり，漁協からの施設貸与が活動継続の規定要因となる。(4)料理教室は需要が増加しており，部員の活動希望や満足度も高い。また，教室の話題は多様であり，漁業者サイドからの情報発信の場としての意義も有している。(5)共通的に「やりがい」などの満足感はあるが，約半数は「できればやりたくない」と考えており，活動者の負担が大きい。(6)起業商品が特産品となることで漁協と地域に貢献し，このことが活動者にはインセンティブに，漁協には支援の動機付けになる。(7)起業収益が部に還元されることで，部の親睦と経済的自立につながる。

第 4 章では，１章から３章までの結果に基づいて，女性部の活動が果たしてきた役割と今後の活動展開の方向性について，以下の 5 節を考察した。**1 節**では，1 章で明らかにした婦人部の設立経緯から，1950 年代の漁村と漁協における女性部の位置づけと性格について，地域婦人会の協力が漁協婦人部を，「漁業と漁家のことが分かり合える漁家女性のコミュニティ」という漁協組合員の家族会としての性格と，「地域の発展を目的とした地域女性のコミュニティ」という地域婦人会の分派という，２つの性格を持った地域女性の共同体として位置づけ，地域全体で漁協に協力する態勢が形成されたことを明らかにした。**2 節**では，1 章と 2 章で分析した活動の構造の比較から，時代に共通的な活動の特徴と，1950 年代と今日の特異的な特徴を分離し，今日的な課題を提示した。時代に共通的な活動の特徴は，「漁協と地域に対する利他的動機と効果を持つ」「視野の拡大を感得できる」「共同する」「女性の地位向上が困難である」ことである。一方で，1950 年代の特徴は，「部員を対象とした活

動であった」「生活に密着し，実生活に便益があった」「喜び，達成感などを感得できた」「能力が向上した」「女性の地位向上に対する意識が強かった」ことであり，今日的特徴は「外部の人に働きかける活動である」「漁業と漁村の情報を外部に発信する」「地域に貢献する」「女性の地位向上への意欲が低い」ことである。また今日の女性部内においては部長と部員間に意識の差があり，年代による考え方の違いもあることから，女性部自身が「入部することのメリット」という問いに答え，効果を実感できる活動を創出することが肝要である。さらに「地域のつながり」の大切さを女性が実感している現状において，地域における「女性同士のつながり」を考えることも女性部の今日的な役目である。**3 節**では，1 章の資料分析で抽出した「女性の地位」に関する要素と 2 章の分析で明らかになった「女性の地位向上」の否定感をもとに，今日の女性部への入部拒否の要因と，女性部の位置づけに対する他県の女性部長の考え方を加味して，女性の地位向上と男女共同参画について考察した。女性の地位向上は女性部設立の第一義的目的であるが，今日においても地位の向上感はなく，またこれに対する意識も低い。しかし，今日の女性部が婦人部時代の社会情勢と女性の考え方に基づいて構築されてきたように，女性部の将来性は現代の社会情勢－例えば男女共同参画のような新たな社会の仕組みづくり－と女性の考え方に基づいて構築されていくものであり，「漁協の下部組織」という認識の上に，地域事情に即した柔軟な対応策が取られて然るべきである。現状では女性の地位向上や男女共同参画に関する勉強会を行っている女性部は少ないが，古くて新しい女性部活動として日常的な勉強会を取り入れてみることも，今後の活動の方向性の一つとなり得る。**4節**では，３章の活動内容の課題と効果，および起業活動の継続要因と漁協との関連から，今後の活動展開の方向性を考察した。長期にわたって製造施設が必要な起業活動では，漁協から借用可能な施設がなければ活動を継続できない。そのような場合には，公共施設や民間施設の利用，助成金制度の活用も一策だが，施設確保の問題を女性部だけでの解決するのは難しいため，仲介や申請に関わる具体的なサポートが必要である。また開発された商品が地域のブランドになれば漁協の期待も大きくなり，女性部の生産能力を超えた製造量を達成しなければならないという状況が起こり得ることには注意が必要であり，施設を作った（作ってもらった）が故に生産量を落とせなくなるというパラドックスも起きる。しかし，地域事業に展開すれば地域女性の地元雇用の場になり，女性部を中心とした地域活動への広がりという可能性もある。このような起業活動の実現と継続に関わる課題を明らかにすることは，今後も継続が必要な研究課題である。**5節**では１章から本章４節までをふまえ，漁村の将来性と女性コミュニティとしての女性部の存在意義について，総合的な考察を行った。女性部とその活動が貧困解消や生活改善の目的において既に役割を終え，経済的にも生活環境的にも豊かになった現在では，活動者は実利的な活動効果を実感し難いが，活動効果は外形的な成果だけではなく，活動によって得られる満足感や連帯感など，現代であればこそ重要な内面的効果を持っていることに意味を見出し，老年女性にとって健康にいきいきと過ごせるような，楽しくやりがいのあるコミュニティ活動を創出することも地域の重要な役割であり，

そのような活動の創出に支援をすることは漁村の維持と存続に資することである。

本研究では，北海道漁村における女性部の組織と活動の特徴および役割を，社会的背景における女性問題と漁協・漁村との関連において女性部を位置づけ，資料分析とアンケート分析によって過去と現在の活動の構造を定量的に分析することによって，漁協女性部の本質的な特徴と今日的課題を明らかにし，女性が自立的に行う活動展開と活動支援の方向性を明示した。本研究によって，今後の高齢化漁村社会においては，女性部を「女性同士の交流，つながりの場」として活用することは地域の重要な役割であり，漁村に居住する女性に「やりがいのある活動」への支援を行うことは，漁村の維持と存続に資するための社会的役割の一つであることを示すことができた。